

エドヴァルド・ムンク作『春』の鑑賞～「死に向かう姿勢の捉え方」をめぐって（中学
3年生の場合）

立原慶一

医療機関において死亡する者の割合は年々が増えており、昭和51年に自宅で死亡する者の割合を上回り、さらに近年では8割を超える水準になったといわれている。そのためこの日本社会では、自分自身の生や死を見つめ思索を深める、という機会が喪失した観がある。しかし一方で芸能人が「若年性癌」や「若年性脳梗塞」で予期もせず命を落とすという、悲劇的な事例がマスメディアを賑わせている。

そうした視点から見れば、中学生にとって死は重大な関心事になっている、とも考えられる。いずれにせよ次世代を担う彼らの死生観は、現代社会において興味深いものとなっている。それを窺い知る手がかりが、エドヴァルド・ムンク作『春』の鑑賞活動に求められるのである。そうした切り口を設定することによって、死に向かう姿勢の捉え方の実態が、露わにされてくると思われる。

今回の題材実践は『春』を中心として鑑賞し、併せてムンク作『病める子ども』と比較鑑賞するというものである。鑑賞体験が一段構えではなく、二段構えを採ることでそれを複合化し、そこに新たな情意的局面が現れてくる。その点に特徴がある。

美的感受能力は本絵の鑑賞活動を考察する場面で概念化されたが、それが高位にあることの現実、鑑賞行為の実質を迫真性に方向づけ、感受されるべき主題を「希望ある死への前向きな姿勢」、という情感に帰結させる。主題の高度な感受のあり方とは、ムンク作品に対する「複合的情感」の主題感受を意味させるが、それは生徒の感受能力によって裏打ちされるのである。低位者は三人称的テーマ把握に留まる。それに対して高位者や、中位者の一部は主題を交錯的な情感として感受する。それは死の悲しみや苦悩の裏側に、希望が潜んでいることの謂いである。そうした知見に実践事例の分析から辿り着くことができた。

今回の題材実践で、一人称的テーマ把握者と二人称的テーマ把握者を合わせた63人、全体の45.3%の生徒が死と生をめぐる価値観（生きる姿勢）を刷新しえた。彼らにあって悲しみや苦悩を意味のある経験に変えたのである。それは中学3年生にとって、死の準備教育になったものと思われる。

美的感受・感知力は比較鑑賞活動の段階でも、新たな視点から引き続き概念化された。感受能力高位者はもとより中位者の半数は、「希望ある死への前向きな姿勢」を主題として感受・感知した。さらに彼らには慈愛や美しきものなど、人間固有の卓越性を自由に求める、心情が身についたのである。逆に考えれば、低位者は懸案の美的感受能力を高めるならば、死と生が主題であると見なされる作品の鑑賞を通して、人間として本来のあり方やより良い生き方を志向できるはずであろう。

既述の通り、美的感受力とは造形的特徴から美的特性を直観的に把握する能力のことであるが、それは絵の第一印象など鑑賞行為の端緒、実に身近なところで働くものであ

る。私たち教師はそうした事態に着目し、その小さな芽を大切に育てなければならないであろう。美的感受力の育成は「希望ある死への姿勢」という複合的情感を受け止められるようになれる道程でもある。